

第三特別調査室長

かめざわ ひろのり
亀澤 宏徳

近年、多くの企業等がダイバーシティの推進に取り組んでいる。これはダイバーシティ&インクルージョン(多様性と受容)とも言われ、企業の経営戦略として、多様な人材(性別、年齢、国籍、障がい等の有無を問わない)を活かし、個々人の能力が最大限発揮できる環境を整備することにより、活力や価値創造につなげていく考え方を背景としている。

ダイバーシティを推進する上で、その一助となるものにヒューマンライブラリー(以下「HL」という。)がある。HLとは、話し手を「本」、聞き手を「読者」に見立てた人を貸し出す図書館で、1冊の本と少人数の読者が1回につき30分程度対話するイベントである。主催者は司書役として運営を取り仕切り、誰でも参加できる。障がい者、LGBTQ、難病患者、難民、各種依存症など偏見を持たれやすい人、様々な困難を抱えたいわゆるマイノリティの立場にある人が生きた本となり、生きづらさを含む体験を開示するとともに、読者との対話を通じて相互に理解を深めていく。HLには、偏見やステレオタイプ(固定概念)の低減、異文化等に対する相互理解の促進などの効果があることが知られている。

HLの歴史をたどると、2000年夏、デンマークでアバゲールらが創設したNGOにより世界で初めて開催されたことにまで遡る(当初リビングライブラリーと称していた)。見知らぬ他者に対する偏見を低減し、暴力なき世界に近づける実践的な方法として、HLが編み出された。社会的マイノリティに対する差別や偏見を克服する手法として注目されると、世界各地に広がり、我が国では、2008年12月、東京大学先端科学技術研究センター中邑研究室が京都のカンファレンスで初めて開催した。それ以来、大学、市民団体を中心に全国各地で開催されるなど広がりを見せている。

HLでは、「読者」は様々なカテゴリーの中から興味のある「本」を選んで、本と読者が膝詰めで対面し、障がい者やLGBTQ等の人々がこれまで自身を取り巻く困難な状況にいかに向き合ってきたかといった話に耳を傾け、自由に対話することができる。また、本が生き生きとした表情で語りかける姿は印象的であり、読者は次第にライフストーリーに引き込まれていくのがわかる。当事者ならではの語りには説得力があり、対話を通じて本と読者が新たな関係を構築する機会を提供されていることに気づかされる。マイノリティに対する接し方を考える上で認識を深めることができ、貴重な読書体験となる。

我が国でHLは、大学、東京HL協会等の市民団体などが主催して行われており、地方自治体、社会福祉協議会、教育委員会、HL学会等の後援を得て開催されるなど各地で多くの実践が蓄積されるとともに、HLの効果や有効性について、社会学、心理学、教育学等の見地から学術的な調査研究が進められてきている。HLを活用したコミュニケーション能力の涵養等人材育成などの新たな取組も始まっており、今後の活動に注目したい。